

万葉集平仮名傍訓本切再論

田 中 大 士

一 同一断簡に対する二本の論文

先般、万葉集の断簡の一つである平仮名傍訓本切について論文を書いた。すると、約一年後に江富範子氏により同じ断簡についての論文が公刊された。しかし、その論は、〈付記〉で校正の段階で拙論を知り、結果として拙論に言及せずに公刊された由が記されている。当該二本の論文で扱われている断簡は、巻一にたった二葉しか現存せず、その性格を知る手がかりはきわめて限られている。事実、この二つの論文は、ともに全く同じ観点から論を出発させている。にもかかわらず、二論文で、当該断簡についての見解は大きく異なっている。このような場合、普通ならば、後発の論文が先行の論文を批判する形で展開するのが一般と考えられるが、江富論文が拙論を参照していないため、この断簡については、一度も論がかみ合わないまま現在に到っている。そこで、拙論を書いた立場から、江富論文に対する見解を述べる次第である。なお、先掲の拙論と江富論文とで、当該の断簡についての呼称が異なっている。混乱を招かないように、本論文では、一貫して「当該断簡」と称する。

二

当該断簡についての二つの論文は、以下の通りである。

田中大士「万葉集平仮名傍訓本断簡の性格」早稲田大学日本古典籍研究所年報 第一四号二〇二一年三月

江富範子「天理図書館蔵万葉集巻一断簡（伝清輔筆切）」萬葉第二三三三号 二〇二二年三月

当該断簡の書誌的な説明は、両論文に詳細に記されているので、ここでは省略する。概要を述べれば、巻一の旧国歌大観番号二六題詞から二九題詞に到る二葉の断簡で、一面七行、題詞は歌よりも低く書く形で、平仮名傍訓の形式で書かれた写本の断簡である。書写時代は鎌倉期と推定される。この時代の万葉集の写本としては、訓が平仮名で、歌本文（漢字）の傍らに書かれる、いわゆる傍訓形式の伝本は他には見られず、この点が当該断簡の性格を考える上で重要な観点になる。

先述の通り、たった二葉しか残らぬ断簡故、その性格を知るための手がかりは限られている。そのこともあってか、両論文は奇妙なほど似通ったアプローチを行っている。それは、当該二葉の断簡と

細井本の当該部分を並べて掲載する点である。素性が全くといってよいほどわからない当該断簡の内容は、現存本の中で、細井本ときわめてよく似ているのである。現存の万葉集伝本は、非仙覚本と仙覚校訂本とに分けられ、仙覚校訂本は、第一次校訂本の寛元本、第二次校訂本の文永本とに分けることが出来る。細井本は、その仙覚校訂本の寛元本系統に属する。当該断簡二葉は、細井本と比べると、一面七行である点など書写形式がよく似ており、本文・訓の内容も酷似していると言つてよい。この当該断簡と細井本との酷似は、いったん見つけてしまえば、否定しようがない事実といえよう。しかし、ともにその動かしがたい事実の指摘を出発点としながら、二つの論文の結論は驚くほど異なつた方向を向いている。

まず、二葉の断簡の中で最も大きな部分を占める二六長歌の訓の類似について見て行こう。次に掲げるのは、当該断簡（この部分は、日比野浩信氏蔵断簡）と細井本の二六の訓を抽出したものである。片仮名の訓が細井本、平仮名の訓が当該断簡である。訓が二行になっている部分は、歌本文の右と左に付訓されていることを意味する。

ミヨシノ、ミ、カノヤマニ トキシクソ ユキハフルトイフ
ヒマナクソ

みよしのの み、かのやまに とししくそ ゆきはふるといふ
ひまなくそ

アメハフルトイフ ソノユキノ トキナラスコト ソノアメノ
ヒマナキカコト
ヒマナキコトクイ

あめはふるといふ そのゆきの ときならぬこと そのあめの
ひまなきことく
ひまな□□こと

クマモヲナス オモヒツ、ソクル ソノヤマミチヲ

コシイ

くまもおちす おもひつ、そくる そのやまみちお

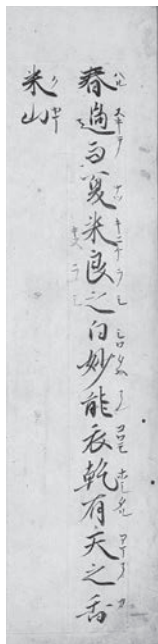
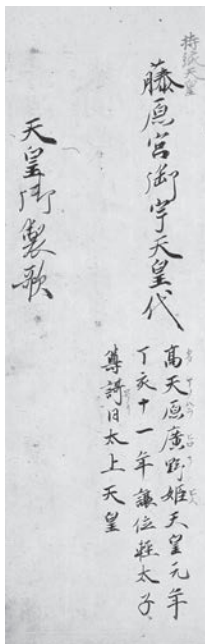
こし

この両本の一致具合は、現存伝本の中で最も近いというだけでなく、両者の訓はほぼ合致していると言つてよい。ただし、江富論文では、この一致具合について、

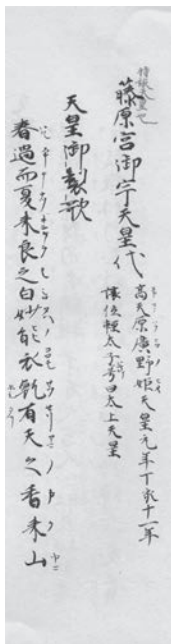
細井本と一致すると言つても、細井本に異訓が併記されている場合、漢字左に書き入れられた訓、すなわち。f「ヒマナキコトク」・i「カコヤマ」、小異はあるがk「サラセル」など、もともと非仙覚本の訓であつたものが仙覚寛元本系統である細井本に残つたと推測されるものと一致する。

と述べている。細井本の歌本文左の訓は「イ」本表記であるため、これは本来の訓とは異なる他本の訓という考えが示されている。江富論文では、結論として、当該断簡と細井本の訓は大変よく似ているが、実質は、寛元本系統である細井本に残された非仙覚本の訓と一致していると述べられている。しかし、長歌の部分で見ると、第一〇句の場合、両者で左右の訓は逆であるが、複数訓のある二句の訓は左右とも両者で同じ訓である。つまり、当該断簡と細井本の訓は、長歌では訓の内容が酷似しているだけでなく、「イ」本表記があるなしにかかわらず歌本文の左右の訓まで一致しているのである。

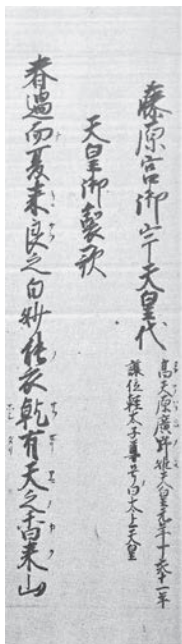
④紀州本（昭和美術館蔵）（広瀬本に同じ）



⑤西本願寺本（石川武美記念図書館蔵）（仙覚文永三年本）歌、題詞より高い



⑥金沢文庫本（同右蔵）（仙覚文永三年本）題詞より高く、歌より低い



これを鎌倉期当時の伝本と比べると、非仙覚本片仮名訓本系統の広瀬本・紀州本は歌よりもやや高い位置、仙覚文永本である西本願寺本は題詞より高く書かれている（文永本は題詞が歌より高い）。当該の二本と同じなのは、文永三年本と位置づけられる金沢文庫本だけである（ただし、金沢文庫本は一面八行）。当時の伝本間でも、標題の高さは、題詞や歌に対して様々である。その標題の高さが二本で一致することは見逃せない事実であろう。以上、訓の内容、歌本文の内容（後述）、一面行数の酷似に加え、標題の高さまで一致していることは、偶然では片付けられない。ならば、先ほどの両本の長歌の訓の一致も、細井本のような寛元本系統の本に基づき、当該断簡が作られたためであると考えなくてはならないことになる。短歌の二八の訓については、二六の長歌ほど細井本と合致していない。次の通りである。例によって、片仮名訓が細井本、平仮名訓が当該断簡の訓である。

ハルスキテ	ナツキニケラシ	シロタヘノ	コロモホステフ
	ナツキタルラシイ		サラセルイ
アマノカクヤマ			
コイ			
はるすきて	なつきにけらし	しろたへの	ころもさらせり
あまのかくやま			

細井本で二重訓になっているところが、当該断簡で単一訓である点が気になる。が、ここで明白なのは、当該断簡の訓は、すべて細井本所載の訓の範囲に収まっているという点である。違いは、細井

本の第四句の左訓「サラセルイ」が「さらせり」となっていると
ろだけである。二八の訓においても、当該切が細井本の様な伝本を
参照していたと推定しても矛盾はない。

これは、先掲拙論でも述べたことだが、当該断簡の二九題詞は、
二八の歌の第二行の下に潜り込むように書かれている（下段の当該
断簡写真左の最終行参照）。普通に考えれば、歌が二行に書かれ
ば、次の歌の題詞はその次の行に書かれるはずであり、それ以外の
選択肢はあり得ない。この題詞の書かれ方はそれほど異様である。
これを如上の想定に沿って考えれば、当該断簡を細井本のような伝
本の判面に合わせるための措置だと考えられる。

以上、当該断簡と細井本の類似を改めて確認するために、先掲拙
論に重ねて当該断簡と細井本の当該部分の画像を掲載しておく。

しかし、江富論文では、当該断簡と細井本とは、訓だけでなく、
歌本文も直接関係がないと述べている。その最大の根拠は、二七の
第四句の異同である。

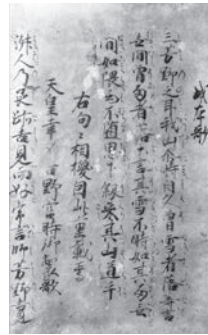
吉見多（当該断簡）

吉見与（細井本）

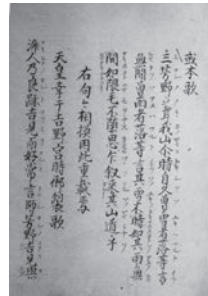
この異同を初めとし、当該断簡と歌本文が一致する現存伝本はな
いと結論づけている。しかし、当該断簡と細井本の類似は先述の如
く、全体に及んでいる。歌本文も右の点を除けば、ほぼ一致してい
る。その事を前提として考えれば、歌本文の一、二箇所の違いは、
両者の密接な関係を考える際にさして影響がないと考えられる。細
井本や同系統の神宮文庫本は、前者が江戸時代、後者が室町時代の
写本である。これらの写本がある時期の寛元本系統の伝本の姿を反
映していたとしても、伝来の間に多少の異同が生ずることは必然で
ある。この一箇所のみ歌本文の相違から両者の深い関係を否定する

上段 当該断簡

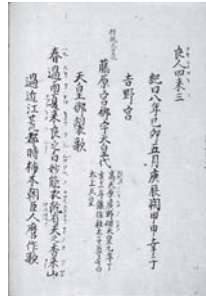
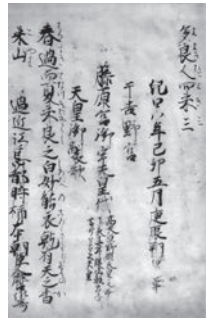
右 日比野浩信氏蔵



下段 細井本 東洋文庫蔵



左 天理大学附属天理図書館蔵



ことは合理的でない。

以上、江富論文は、歌本文、訓ともに現存伝本のどれとも一致し
ないものであるという結論を導いている。その是非については当方
の評価は述べたが、一つ大きな疑問を感じる事がある。当該断簡と
細井本との類似は、江富論文では、いわば見せかけだけの類似であ
るとしている。にもかかわらず、論文冒頭に当該断簡と細井本の比
較図版を載せているのはいかなる理由によるのであろうか。当該断
簡二葉を並べて提示するだけでなく、それに合わせて細井本を提示

するには相応の理由が存するはずであるが、その理由については詳細は述べられていない。³⁾

三

当該断簡が他に類例を見ない平仮名傍訓である点について、江富論文は、拙論〔片仮名訓本系統の長歌訓の登場〕「関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー」第八巻 平成二六年三月）の広瀬本巻二の長歌訓の考察を参考にしているが、適切とは思われない。拙論は、片仮名訓本である広瀬本の巻二の長歌訓に平仮名訓が集中していることについて、仙覚校訂本で巻二の長歌がすべて古点であること（つまり、古い平仮名訓の本があること）、また、忠兼本の書写本である現存本天治本の巻二の長歌の残存四首にすべて訓があることを根拠に、広瀬本が忠兼本を雲居寺で写した際の状況を反映したものと推測した論である。極めて限られた状況を推測しており、この巻二長歌の平仮名訓の特殊な事情を、広瀬本の各所に散在している短歌の平仮名訓（したがって、各所の短歌の平仮名訓は、事情を異にする可能性が高い）に簡単に応用できるとは考えられない。

その際、江富論文では、当該断簡が無訓の本に新たに訓を付けたという想定であるが、その一環として京都女子大学蔵の「古万葉切」（無訓本）がそのような本であったことを述べている。ただ、当該断簡の漢字本文部分が、本来「古万葉切」のツレであるか否かという点については論述は曖昧で、明言されていない。だが、江富論文の主張が成り立つためには、両者がツレであることが最低限クリアすべき条件と考えられる。現存伝本では無訓の本はきわめて希であ

り、一本まるごと無訓の伝本、あるいはその存在を示唆する伝本は皆無と言つてよい。そのような無訓本の存在を他に存在することを想定して、それを前提に論を組み立てるのはあまりに現実性がないからである。

では、当該断簡と「古万葉切」が本来ツレである可能性を突き詰めて行くと、問題が多い。一面七行、寸法、字高などは一致するものの、筆跡では、たとえば、「之」などの書き癖は明らかに異なっている。また、江富論文では、両者の類似性を論ずる部分で、「三字程度の題詞の下げ方も一致する」としているが、「古万葉切」は、三字下げではあるが、実質は三三・五字である（つまり三字以上下がっている）のに対して、当該断簡は、三字〜二・五字下げ（三字以内）という感じで、いささか差がある。それは、巻（巻一と巻二）による違いとも言えようが、先述のように、そもそも、たぐいまれなこの無訓の「古万葉切」が、本来二〇巻そろって無訓で存していたものか（つまり、当面の巻二の無訓切の存在が巻一にも及びうるのか）、この部分だけ偶発的に無訓であるのかの論証も必要と思われる。

以上、江富論文は、当該断簡が、無訓の伝本（京都女子大学蔵の「古万葉切」のような本）に、他系統の伝本から訓を移入したという想定から、歌本文と訓は本来別系統であると推測している。が、それにしては、当該断簡の歌本文の判面構成や歌本文、訓などの造りが現存の細井本に似すぎている。細井本のような寛元本系統の伝本を元に平仮名傍訓の本（あるいは断簡だけでも知れない）を作つたと考えざるを得ない。仮に、当該断簡の様相が細井本に酷似していることが、一見そのように見えるに過ぎない、いわば見せかけの

類似と考えるなら、当該断簡と「古万葉切」のような無訓本との関係が当該断簡と細井本との関係以上に深いつながりであることを論証する必要がある。

注(1)

仙覚寛元本系統の伝本としては、普通は、より書写時代の古い神宮文庫本が用いられる。が、当該部分は、神宮文庫本で失われており、細井本の画像を使用し、それによって比較を行う由、両論文で断られている。

(2) 金沢文庫本は、『校本万葉集』以来、文永十年本の寂印・成俊本系統と認識されていたが、拙論「金沢文庫本万葉集系統論序説」(万葉 第二二二二号 二〇二二年三月)により文永三年本とされている。

(3) 当該断簡と細井本の判面が似ている点を考えるとき、一つ問題になるのが、二六の題詞の「或本歌」が歌と同じ高さになっている点であろう(江富論文でも指摘されている)。これは、細井本のこの周辺の題詞の高さを見ると、前後とも題詞は歌より低く書かれているので、細井本の誤りかと考えられる。その点を判断するには、普通は、同系統の神宮文庫本の同部分を参照するのだが、先掲拙論で述べたとおり、神宮文庫本はこの部分が現存しない。そこで、同系統の一つ今出河本(宮内庁書陵部蔵 一五四―三八 書陵部の登録名は「今出川本」)の同じ部分を参照すると、歌より低く書かれている。「或本歌」の題詞の高さは、現存寛元本系統内の細井本の誤りと考えられる。

当該切と細井本との判面が一致している点については、江富論文では「たまたま、当該切と神宮文庫本第十七丁が合致したとも考えられる。」(P三四下)としている。

〈付記〉本稿執筆に当たって、当該断簡の前半の二葉(巻一、二六―二七)

は所蔵者の日比野浩信氏より、後半の二葉(二七―二九題詞)は所蔵者

の天理大学付属天理図書館から掲載の許可をいただいた。また、細井本万葉集については所蔵者の東洋文庫から掲載許可をいただいた。広瀬本は関西大学図書館から、紀州本は後藤美術館から、西本願寺本と金沢文庫本は石川武美記念図書館から掲載許可をいただいた。いずれも記して感謝申し上げる。なお、本稿は、日本学術振興会JSPSの科学研究補助金の助成(基盤研究(B)「万葉集仙覚校訂本の総合的研究」課題番号18H00616代表研究者田中大士)に基づく成果である。